



子  
世  
之  
名  
色  
通  
一

子 4  
1358





前北齊卍翁著彩色通之一

第廿五号

于多4  
1928



1988



前北齊尺翁著彩色通之一

前北齊尺翁著彩色通之一

繪具品目

序文

初心未熟の門人乃乞ふに但せ此小冊を後りて同志の輩に傳ふ相共不足は我寫し熟得の後猶改革此力を加へ丹青用勢力助とすつて古法を一品一用を不す此の三四種を合つて數ふ不變化の可くを好みす都る故人の為工ありて就は九法ありとて又介字乙字鳳眼燕尾木の画法正しく猥り不自己の念を棄つて今世上手名人





の諸先生益々守りて其技藝重なり已に六才  
の比より物の形を写する術ありを日夜筆を  
捨すを古画を学ぶの道をも亦て其画人  
の教へ懐くとも生得思味し其教訓を  
え聞受くやその記憶あるは利鈍の二つを以て  
きんされれ一は癖止事をもゆる拙き筆を捨  
棄て空しく獨立するの術あり是理外の業画と  
ハ異なり只眼に透る物の形象を寫し画に  
色も其ありを写すは以て是を学ぶものも少  
す俗人をも画と心得其用亦奇を以て人又  
画形を写し其形を以て其道なきも聽物に思  
育自悦罷をあるに所あり其道中其  
も父母の教へ陰陽の及理をもつて其を  
す天地自然造化の術を所し四方此語を子  
の老人我知れぬ事なり



繪具品目

廣瀨 三千本

千本

膠にかわ

上瀨 中瀨

極吟味共、えりい、  
く用。

明礬めいばん

生めうむん

焼めうむん

豊後

松印

板流ろくせう

緑青ろくせい

素良石ろくせい

銅の錆より製す

主月漆しゅげつ

上 同

中 同

画の良紙より上り少し

漆をよき調へて製す



雌黄 年天印 中

艶印 極印

辨柄 多子系 吉系 上州系

余中妙系

石黄 同中 下り

中画の色をよきよし

丹 長吉 せう吉 光明 市呂系

勝系 宗久

朱 極製 下光明 五本朱

紙の上に押しつけ色白く  
まきからふしし色赤い

胡粉 水干 不用 金系 雪山系

花系

同粉胡 八の判 七の判

五の判

墨 大平 けん不らすみ

油煙すこ



平前不糸

猩猩脂セウミンシ 俵の字下にて用

未了字不中

板流し

吉平

上平

栲便平カウベン

青岱セいたい

桑平

勝平

庄平

不用

弥三郎

弥兵衛

一山平

不用

同粉

煉藍蠟

新登紅平

生園子

田平

七平

極上下

上

同中

中

井の上平

唐土とうど

言平

九平



雲母 大無類  
中無類

アラ  
ヒヤ  
コニ

小薩摩甘

小緑青 いさゝり用ル

粉緑青 同

群青 いさゝり用ル

山石緑青

青 二番  
白 二番

白群青 同

不用

岩白緑

白緑

中泥白緑 不用

花緋青 いさゝり用ル  
べろふねー用ル

岩緋青

不用

黄土 盛黄土

朱土 不用

繪具

小朋黄ハ五ノクサコト色ヨクアハルヲ用ル

外品

玉ノセヲ程々トシテ其中ノウツミヲ入至シテ色ヲ整シ



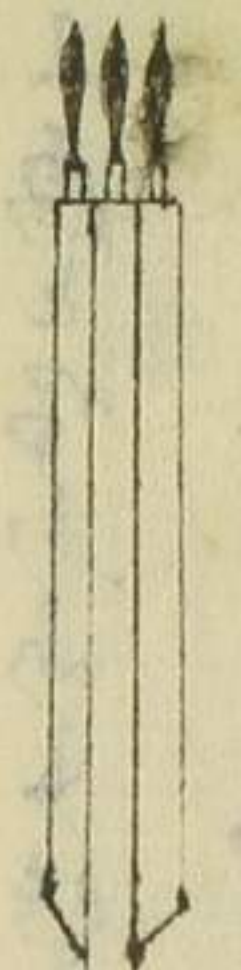
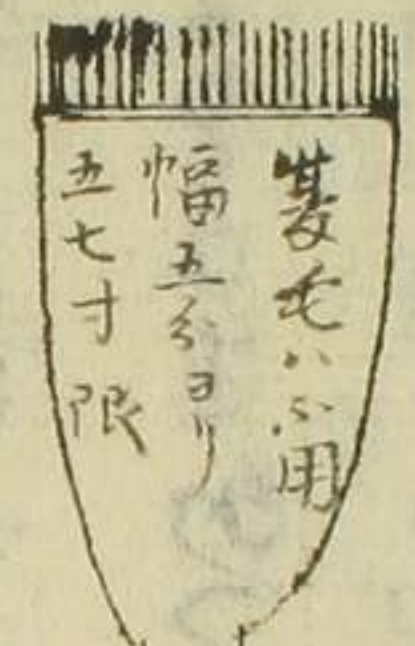




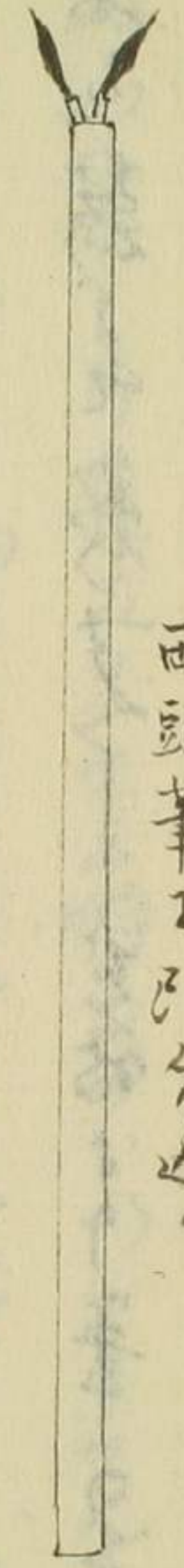
清百筆の後用と人ありをあととてのりも多き  
 漢をも以て其の末を免し強しく筆を執る

○刷毛 并 連筆 文廻 楯定木の話

此の毛をあるはく筆をすしとて用  
 筆のその方利あり



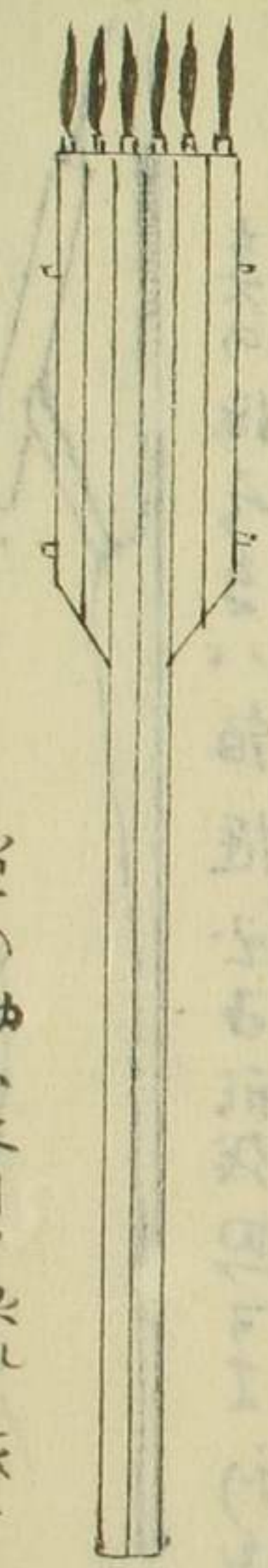
此亦輕ハ点付を以て製ス



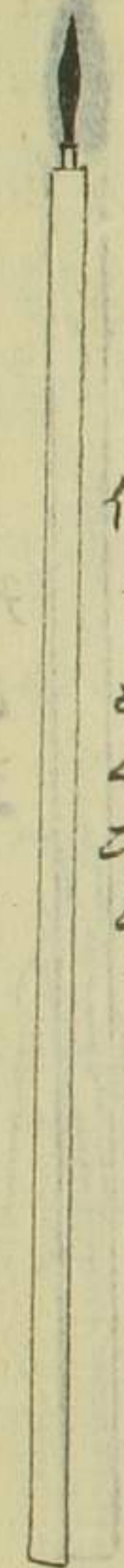
両頭筆ト云ク也



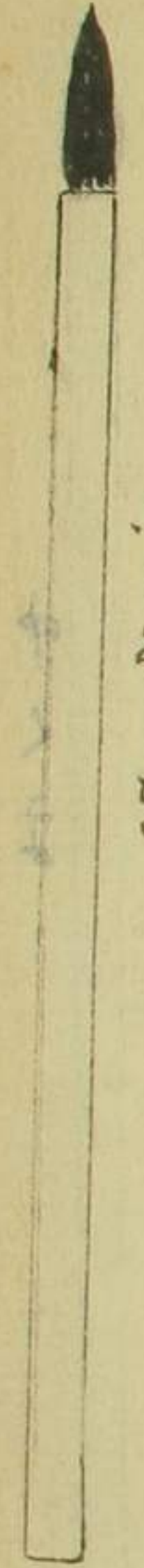
点付ケ下リを用ハ板下又ハ人物の面影畫數ハを画ハ利也



筆の袖ハ七ヨリ限ル 長キハ用ナシ



俗ト云ク也



小ト云ク也



中くま



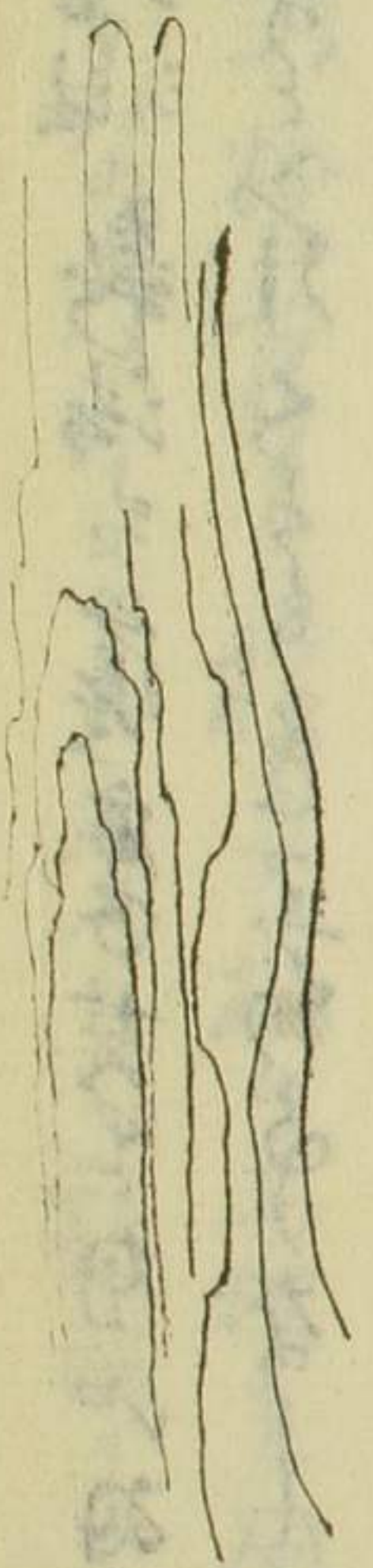
大くま



真の何れもハ飯櫃玉子形残四寸上リあり

桶定木古法ハ竹又喜路にて製不用新ハ其筆  
此是クありて是等滞りて自在あるハ桶定  
木ハ籬を急すくハ其時より筆の是等  
竹二十倍す用以ハ新くハ古法より是木

中細く極く一弦を張りて曲るるを画くの用とす  
又少くハ片長刀ホウ癖あるハ以りてせんニ其行  
造りしより筆を木の方を満く突入し手を控り以  
くらし筆をもちしりて其内より見ハ又あり  
見ハかくハとくハ引く時ハ





糸のこく自在なり 是を押し手と不糸扱  
り勿違用也

罽毘ビ古法 新法は後序其を用ゆ羽二重  
倍細なり引くとも色もあつなり一と  
まのう布扱其のこく一厚ひく一熱立  
布ここ一てきふまつまをかく熱て塗物  
を張るなり水も金糸の何押し砂子あり  
用てて扱まする

又不壁土天井 其若他物ふはの内裏の砂子  
を扱く事あり 糊紙の裏を斜に扱ゆ色  
是方て紙を角より巾中を扱ひ多く熱く掃り  
と後には紙扱ひく金糸あり厚く砂子を扱  
りて其糸の形をくく一扱て糸んと糸を扱  
まつを引き是を押し綿をそのと押し砂り  
なく其糸の時まつありをい治くの糸と上  
糸のうり引き押し糸

○古法は綾草あり櫛又相の柄を用ひて  
し柄も多ありはるる用ひる新法は不用  
す糸夕丈より用ひ標の売を七寸あり  
と糸をありお糸を糸一回りして用ひ



和らして紙を強く握るゝるゝは馬車一軌法  
ありて古人の高きハ高きと云ふは倉成様書  
木の事ハ法あると云ふ少説

○画紙を縫ひ下張り上右法と云ふ遺すは  
に粘を付粘をぬき下張りの厚粘りぬりて  
以てして張りぬき画き上りて批する時  
尤心まひさるゝ人ありと云ふ新法は粘の厚者  
合たぬハ下張り新法も亦斗りて  
一弱粘をぬき粘の厚者下張りて紙を  
粘りぬき張り下張りぬき下張りぬき

右斜にぬき批す下紙と粘と云ふの事

新法画の中粘つ方を不用に云ふ事

小緑馬 新緑 玉緑馬

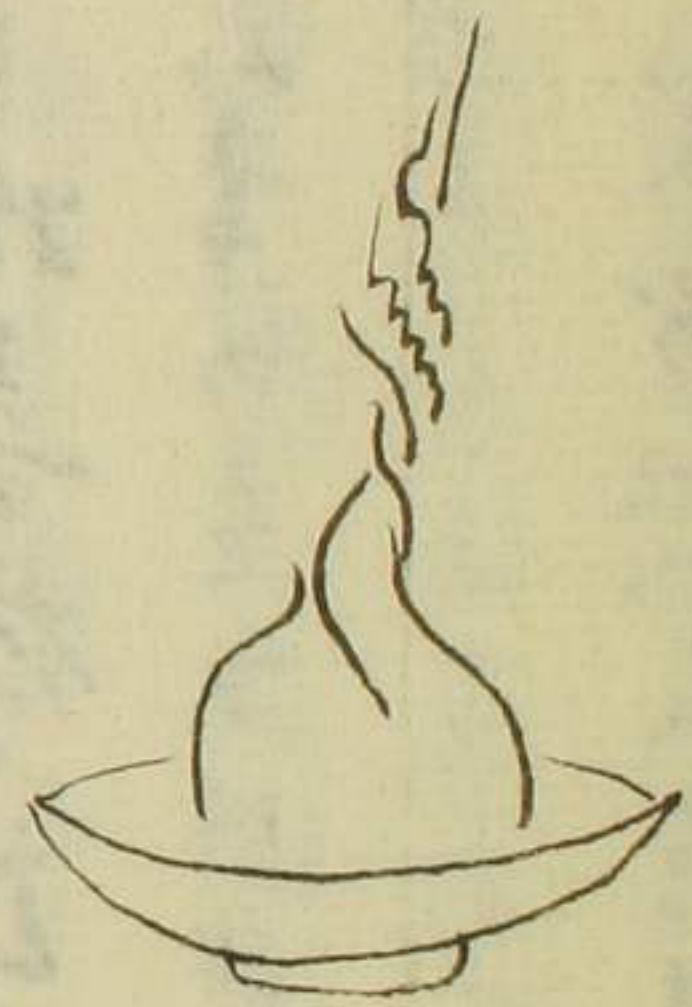
初らんせし  
まゝの事

少く粘りぬき粘りぬき粘りぬき粘りぬき  
粘りぬき粘りぬき粘りぬき粘りぬき  
粘りぬき粘りぬき粘りぬき粘りぬき  
粘りぬき粘りぬき粘りぬき粘りぬき

○玉緑馬の製法方其の水を十分の熱さして  
中へ緑馬をいれて四方より粘りと粘りぬき



己分の湯乃牛よて布の上より



不残湯水出るときは布の内より澤とるし残る  
きし〜〜〜〜〜きしぬ水清くなりその上を  
きりて刀用ひふ分押をきり紙のそ〜〜油を少  
刀際せかの縁らの中へ指の先よりそ押しお  
指と指を離し解ききききききき〜油との

ききき縁らの上へ糸の通の中より〜油  
をききき〜油をききき〜油をききき〜油  
具の中へ油をききき〜油をききき〜油  
○その上へ油をききき〜油をききき〜油  
ききき〜油をききき〜油をききき〜油  
油をききき〜油をききき〜油をききき〜油  
油をききき〜油をききき〜油をききき〜油  
○昔漆油をききき〜油をききき〜油  
ききき〜油をききき〜油をききき〜油  
金をいり白漆とす〜画紙よき〜三つ



増減ありきを無くせんと思ふに、  
細粉を金を拵つ用なり

○丹無く新拵りして細く研ぎ  
合を以て、ゆを拵つ用の  
細粉のとり、細粉は色  
をいさよき出さるなり

○朱ハ細末なる物を、  
細つとせん

○赤粉ハ無く新拵りして  
○細粉は、吹盡して  
しるを古法にて、油にて  
煮付たる夏月天より  
七珠より十分あり、  
先の手を無く拵りして  
吹盡して、研ぎ、  
拵るに、細く拵り、  
んを拵りたる、  
なる、  
上へ無く拵り、  
又、

しるを古法にて、油にて煮付たる夏月天より七珠より十分あり、先の手を無く拵りして吹盡して、研ぎ、拵るに、細く拵り、んを拵りたる、なる、上へ無く拵り、又、



し是より下より流し下よりしを流しあり  
併りある此をせしより流し下よりしあり  
しを干し付し用は此のし流し下よりし解し  
用はしを流し下よりしを流し下よりし  
色もしを流し下よりし

○眼黄の汁の汁の汁の汁

○石黄の汁の汁の汁の汁  
しを流し下よりしを流し下よりし  
しを流し下よりしを流し下よりし

○草土の汁の汁の汁の汁

を僅かに新法に併り草土と考付く又併り  
を流し下よりしを流し下よりし

○番の汁の汁の汁の汁

○水黄土の丹を流し下よりしを流し下よりし

しを流し下よりしを流し下よりし  
下よりしを流し下よりしを流し下よりし

色補す丹の上流し下よりしを流し下よりし

○煎の製法に併り煎の製法に併り







よーま、手製してるよ、又店取りとんぼ  
そのおかしな事、あれ、いかにいかにいかに  
ま、おかしな事、あれ、いかにいかにいかに  
す、いかにいかにいかにいかにいかにいかに  
いかにいかにいかにいかにいかにいかに

○ベロシニス一名阿茶院群青、あの色、  
せう、物、その色、いかにいかにいかに  
いかにいかにいかにいかにいかにいかに  
又、あの色、いかにいかにいかにいかに  
いかにいかにいかにいかにいかにいかに

○又、砂、水、その色、いかにいかにいかに  
いかにいかにいかにいかにいかにいかに  
いかにいかにいかにいかにいかにいかに  
いかにいかにいかにいかにいかにいかに

○生、その色、いかにいかにいかにいかに  
いかにいかにいかにいかにいかにいかに  
いかにいかにいかにいかにいかにいかに  
いかにいかにいかにいかにいかにいかに

○石、その色、いかにいかにいかにいかに  
いかにいかにいかにいかにいかにいかに  
いかにいかにいかにいかにいかにいかに



三用ひたりし一布は倍タイニハ百一ノ御とを——一圃  
 〇形物その外に形せり形倍ニ朱を中  
 〇朱を朱に如く朱の如く墨に清くして形をす  
 〇色つふ合をせらるに——  
 〇茶色(青濁)を形物とす——  
 〇白茶を茶に形物を如く朱を合せし用ひ色  
 〇小細ル茶を浅茶と墨を以てするは又茶少  
 〇媚茶は墨と茶を以て形物を福とす

〇小細ル茶を浅茶と墨を以てするは又茶少  
 〇媚茶は墨と茶を以て形物を福とす  
 〇茶色形物に墨を以てするは又茶少  
 〇茶色形物に墨を以てするは又茶少  
 〇茶色形物に墨を以てするは又茶少  
 〇茶色形物に墨を以てするは又茶少  
 〇茶色形物に墨を以てするは又茶少  
 〇茶色形物に墨を以てするは又茶少  
 〇茶色形物に墨を以てするは又茶少  
 〇茶色形物に墨を以てするは又茶少  
 〇茶色形物に墨を以てするは又茶少







あめハ紙ノのひて〜もあつた〜紙の色を  
用ひに目をあつ〜もあつた〜紙の色を

○紙の色を付し〜紙の色を付し〜紙の色を

○米肉をぬぐ〜白紙草油を金  
生薬二つの方量をもりてせ〜ぐろく批き油

こし生薬を〜紙の色を付し〜紙の色を

極よの晒〜艾を油増汁りて〜紙の色を

の出る時引〜紙の色を付し〜紙の色を

平じり米と油と合〜紙の色を付し〜紙の色を

さめハ色〜紙の色を付し〜紙の色を

すき紙粘り〜紙の色を付し〜紙の色を

○油色の法系法〜紙の色を付し〜紙の色を

ありぬ〜紙の色を付し〜紙の色を

○硝子裏紙色の法〜紙の色を付し〜紙の色を







